

まちづくりはひとづくり

知識の偏重より

創造性豊かな人の育成を

市長 貴重なお時間をいただきまして、本当にありがとうございます。また、このたびの日本学士院院長就任、おめでとうございます。

長倉 ありがとうございます。今日はゆつくりいろいろなお話を伺うことができると楽しみにしていました。

市長 早速ですが、市の仕事を行っています。最近特に感じているのですが、まちづくりを進める上で大切なこと、その究極は、やはり人づくりじゃないかなと、思うんです。いくらよい仕組みや施設を作っても、それを運用していくのは人です。

そして、その人づくりはどうなっているのか考えてみると、近ごろの教育は、知識を偏重し過ぎていていのではないかと思います。

人間として、自ら考えていくという創造的思考ができる人を生み出していくことが、これからの教育には必要だと実感しているのですが。

長倉 おっしゃるとおりですね。人口問題、エネルギー問題、環境問題など現代社会には、いろいろな問題がありますが、一番の基本は、そうした問題の解決に貢献できる創造力や実行力

をもった人材をいかに育成するかということでしょう。

そのためには、今のお話の知識を詰め込むということと並んで、創造性を養うということが一つの大きなポイントなわけです。

市長 その二つのバランスが大切ということでしょうか。

長倉 今、知識はいろんな方法で簡単

に、また容易に手に入れることができます。問題は、その知識をいかに活用し、生かしていくか、そして自分の人生の糧にするか、それが非常に大事な時代になってきます。

そういう面から考えると、日本の教育は、知識を詰め込んだり、知識を教えたたりするほうに力を置き過ぎたところが問題だと思いますね。

市長 確かに、高校や大学への進学を目標にしていた教えることだけの教育という面が見受けられます。

長倉 教育は、覚えること、知識を学ぶことと同時に、それをいかに活用するか考えることが大事なのです。

孔子様は本当によく言われていると思うのですが、「学びて思わざれば、すなわち罔し。思いて学ばざれば、すなわち殆し」まさに思うことと学ぶこと、この二つが調和をとった形で教育を受けることが必要なんです。

市長 本当ですね。そういう意味では、調和が欠けてしまっているような感じがしますね。親御



複眼的視点がキーワード

日本の黄金時代だった 二十世紀初頭

長倉 ちょうど今から百年前、二十世紀初めの前後十年ですね。私はこの時期、学術・芸術の面においては日本の黄金時代だったと思うんです。高い志を持って、研究や製作などに集中した時代だったんです。

例えば、自然科学の分野では、ノーベル賞に匹敵するものとして、北里柴三郎の破傷風の血清療法の発見、長岡半太郎の原子模型の提案、静岡原出身の鈴木梅太郎のビタミンBの発見などをはじめ、当時は、世界に誇り得る仕事がたくさん出た素晴らしい時代だったんです。

市長 まさに日本の黄金時代ですね。

長倉 文学の面でも、夏目漱石が一九〇五年、文壇にデビューしました。

画壇では、岡倉天心を中心に横山大観らが加わって、日本美術院が創設されました。私は、夏目漱石に心酔しているのですが、彼の作品を読むところには複眼的視点が感じられますね。

市長 複眼的視点ですか。

長倉 一つの視点からだけではなく、複眼的な視点で物事の本質をつかもうという考え方です。彼の文学が奥深く、また多くの人に親しまれているのもそこに理由の一つがあるのではないのでしょうか。他にも、クリスチャンの内村鑑三が「万物は円にあらず、楕円なり」と言っています。楕円には、異なった中心が二つある。相反する二つの要素があり、そのお互いの持つ作用によって、世の中が進んでいく、これもまさに複眼的視点ですね。こ

こつという考え方は、日本の文化また

さんたちは自分の子供をよくしようと一生懸命です。学校の先生方も一生懸命やっている、でもそこですべての子供たちを見るとバランスがうまくとれていない子供たちも多い。皮肉な感じを受けますね。

長倉 確かに過保護になっている面もありますね。大学で教えている友達から、このごろの学生は自分で考えようと思わない傾向があるとよく聞きます。

教育は社会の価値観の反映

じっくりものを考える習慣を

長倉 研究というのは、わからないことをやるからおもしろい。そういう点から、今後の科学研究を進める上で、現在の教育には大きな問題点があると思っています。私は、教育は社会の価値観の反映だと考えているのです。

市長 価値観の反映ですか。

長倉 今の日本の社会全体がどうも目のことに、重点を置き過ぎています。じっくりものを考えることを社会の習慣として尊重していかないと、教育どころか、日本の社会全体がおかしくなっていく可能性が大きいと思いますね。

市長 そうですね。いろいろなことで便利な社会になってきているはずなのに、逆にずいぶん忙しい世の中になっ

は伝統の中にある極めて日本的な考え方ですね。百年前の日本の黄金時代は、このような、じっくり物事の本質について考えるという習慣がたっぷりあつたものではないでしょうか。

市長 自然科学や文学の分野でも、人間形成には複眼的視点は欠かせないものなんですね。それでは、義務教育の上で、じっくりものを考えるということが、具体的にどのようになつていきますか。

長倉 それは、一つには算数、国語などの基礎学力の問題があると思えますね。これらを徹底して身につけさせることは、記憶力と同時に、ものを考える力を養う上で非常に役に立ちます。

それから、自然に親しむことですね。自然の中には不思議なこと、わからないことがたくさんあります。自然に親しむことにより考える機会が多くなり、考える習慣が身につくでしょう。

てしまつて、ちよつと立ち止まつてみたり、じっくり考えたりすることが少なくなつたのではないのでしょうか。

長倉 情報やメディアが発達していくことは進歩として喜ばしいことですが、これだけ多くの情報をゆつくり考えるには、時間的、体力的な面からみても限界があると思います。

市長 幕末から明治の初めごろで見ますと、海外の情報などは、今と比べたら雲泥の差、すごく少ない量であつたと思います。

しかし、沼津兵学校では、その非常に限られた情報を生かして、新しい仕組みや社会制度、国家の基礎となるものを創った。

それに比べると、現在は対照的で、情報はたくさんありますが、ご指摘のよう、本質的な部分に目が向いてないという感じがします。非常に危うさみがないものがありますね。



長倉 三郎(ながくら・さぶろう)さん

沼津市(旧愛鷹村)柳沢生まれ。愛鷹尋常高等小学校、沼津中学校、静岡高等学校、東京帝国大学理学部卒。分子科学を専門分野に東京大学教授を経て、分子科学研究所長、岡崎国立共同研究機構長、総合研究大学院大学長を歴任。現在は、(財)神奈川科学技術アカデミー理事長。昭和60年に文化功労者、平成2年に文化勲章を受章、沼津市名誉市民にも選ばれる。平成13年10月に、日本学士院院長に就任。



かながわサイエンスパーク(川崎市)
1989年に誕生した我が国初のサイエンスパーク。神奈川県と川崎市が、国の支援と民間企業の協力のもと事業を推進している。長倉さんが理事長を務める(財)神奈川科学技術アカデミーはこの施設の中にある。